

跡見学園女子大学学芸員課程 平成29年度博物館実習について

跡見学園女子大学 学芸員課程 主任教授
村田 宏

平成29年の博物館実習の概要はつぎの通りである。

- ①春学期における、通常授業時の基礎実習、一日の行程で実施する見学実習
- ②夏季休暇期間を中心とした学外の博物館・美術館等での学外実習
- ③秋学期における学外実習事後指導、および花蹊記念資料館を使用した事後実習

①春学期の基礎実習は、例年と同様に、美術資料、民俗資料の取り扱い、写真撮影の基本を中心に行われた。

年度当初の見学実習は、2017年秋に開館30周年を迎える目黒区美術館（目黒区目黒2-4-36）で行われた。一般入館者として展示作品を鑑賞することとは違い、学芸員の方の懇切な解説を伺いながら、搬入口などのファシリティ部門を参観するという経験は、履修生にとって貴重なものであったにちがいない。ご多用中のところご案内いただいた目黒区美術館主任学芸員・山田敦雄氏には心より感謝申し上げる。

参加者の記した実習レポートを二編（抄録）掲載しておこう。

E.K.生

学芸員の方の説明を伺いながら目黒区美術館を見学するという貴重な体験をさせていただきました。これまで知ることのなかった博物館の裏側について種々のことを学ぶことができましたと思います。

まず、目黒区美術館の建築について、住宅をモチーフにして作られたということに驚かされました。博物館と一般住宅では外見も用途も大きく異なることが多いと考えていたため、これは意外でした。また、天井が開き自然光を入れることができる仕組みになっているとのこと。博物館には「資料にとっての良い環境」と「来館者にとって良い環境」という二つの側面が必要と考えれば、これは非常に都合のよいことではないかと感じました。壁面は、壁紙と塗装が施してあるものを使用していて、資料がかかりやすくなっているということも興味深かったです。影の出方や後退感の変化をつけるために、壁をカラーにしたというお話も非常に印象深かったです。「資料の魅せ方」を考えることは、学芸員の仕事の醍醐味であり、ひいては、博物館のオリジナリティにも繋がることではないかと思いました。どの博物館もそれぞれ固有の展示方法を採用しているということに改めて気付いた次第です。普通ならば入ることのできない、すなわち来館者の目に触れることのない施設の見学と説明には驚くことばかりでした。荷物を積んだトラックがそのまま館内に入れるということは初めて知ったことです。また荷物用エレベーターは、3m×3m×3mの荷物を積載でき



る容量で造られているというのも初めて気付いた点です。3階や地下もあり、収蔵庫も三つ、前室もあるというのもまったく予想外のことで、自分が博物館の裏側にはついてまったく認識がないことを思い知らされました。前室という、いわば資料を休ませるための部屋を含め、資料への影響を考え抜いた構造に感心しました。梱包用の包装紙がすべて無酸紙か中性紙であることを改めて知りましたが、資料にとっても人間にとっても理想的な環境をつくり出すことの大切さを再認識させられました。

全体をとおして、今回の見学では資料の繊細さについて認識を新たにしました。とくに目に見えない気温や湿度の影響については理解しているつもりでしたが、実際の空調管理への力の入れ方をつぶさに見て、自分の理解がまだ浅かったことを知りました。人が入室することによって変化する湿度や空気の動き方まで意識したことはなかったため、大変よい経験になりました。

I.U.生

今回、目黒区美術館を見学して印象に残ったのは、収蔵品などを運ぶためのエレベーターでした。博物館や美術館の収蔵品を運搬するため、普通のもより大きなサイズのエレベーターは見たことはあっても実際に乗るのは初めてだったので、どんなものか体感できて良かったです。エレベーターに乗っていて気付いたのは、昇降する速度がとても遅いことと、動き出すときと到着時の揺れが少ないということでした。やはり、美術品を扱う施設なので、移動の際になるべく作品に影響が出ることを少ないようになっているのだなと思いました。また、エレベーター内の広さが3m×3m×3mとなっており、これはこの美術館のモジュールだというお話も面白かったです。収蔵品が通る扉はすべて同じ大きさになっているので、ひとつの場所を通ることができればあとの扉もすべて通れるというのは、分かりやすく合理的でとても良いなと思いました。

ほかにも、展示室の壁の色の話が印象に残っています。展覧会によって展示室の壁の色を塗り替えているということでしたが、他の博物館や美術館であれば、色の付いた可動の壁を設置しているのを目にします。そういったものを使わないのは、展示室をなるべく広く使うためなのかと思いました。また、壁の色を変えることで、絵画をかけたときの影の付き方や距離感が変化し、印象を変えることができるというのは驚きました。色を変えることで印象が代わるというのは想像が付きませんが、距離感や影の付き方まで変わるというのは初めて知りました。さらに、展示室によって床材を変えているのもおもしろいと思いました。他の展覧会が行われるときには、今回の展示とどう違っているのか是非とも目にしてみたいところです。

この美術館でとくに良いなと感じた点は、美術館の建物自体をきれいに見せるようにできているところです。壁面に貼られたタイルの目が、バックヤードへ続く扉や防火扉などにあわせて貼られており、そこに扉があるようには見えなくなっているというのが、美しくとてもおもしろいと思います。ロッカーが外観上、柱のようにして隠されているところなども、デザイナーと建築家のこだわりが窺えていて良いなと感じました。一般的な住宅を拡大するとどうなるかというテーマも、ただ見ているだけではなかなか気付かないところだと思うので、学芸員の方のお話を聞くことができ良かったと思います。その他、部屋を移動する流れを作るために、展示室からワークショップへの通路があったり、ワークショップの部屋を美術館の入り口付近に配置することで入りやすくしたりといった工夫がなされているというお話などさまざまなことを伺うことができ、とても勉強になったと思います。



②夏季の学外実習

夏季の学外実習は、以下の15館で行われた（順不同）。各館にはいつもながら懇切丁寧なご指導とご便宜を賜わった。あらためて御礼申し上げたい。

東京都江戸東京博物館 練馬区立美術館 江東区深川江戸資料館 茨城県立歴史館
埼玉県立歴史と民俗の博物館 千葉県立中央博物館 野田市郷土博物館 東玉人形の博物館
東京おもちゃ美術館 上野の森美術館 村内美術館 鎌ヶ谷市郷土資料館 山崎美術館
東郷青児記念損保ジャパン日本興亜美術館 長野市立博物館





③秋学期は、夏季の学外実習での諸経験をふまえ、花蹊記念資料館を使った模擬展示の企画立案の作業から始まる。民俗・歴史班、美術班に分かれた履修者は、展示の実施計画を練り上げてゆくが、卒業論文提出の時期（12月中旬）と重なり、慌ただしいスケジュールのなか、可能な範囲での最良の企画案をつくりあげ、展示を完成させることになる。

博物館実習生模擬展示

会 期 平成30年1月24日（水）～2月5日（月）
会 場 跡見学園女子大学花咲記念資料館
開催時間 9：30～16：30
日曜は休館
入館者数 349名

展示室1

「“人生儀礼”～誕生から成人・結婚までのライフステージ～」

担当学生名 伊藤 紫 浦野 愛幸 片山亜津紀 金子 恵梨 菅原 佑香 徳永佐和子
林 千晶 宮本 悠喜

概要

皆さんは誕生してから今まで行ってきた人生儀礼を覚えていますか？ 私たちは、それらの主人公として様々な儀礼に参加してきました。

日本人の暮らしの中では、人が生まれてから死ぬまでの間に、年齢や精神の成長の節目に合わせて、様々な儀礼が行われてきました。

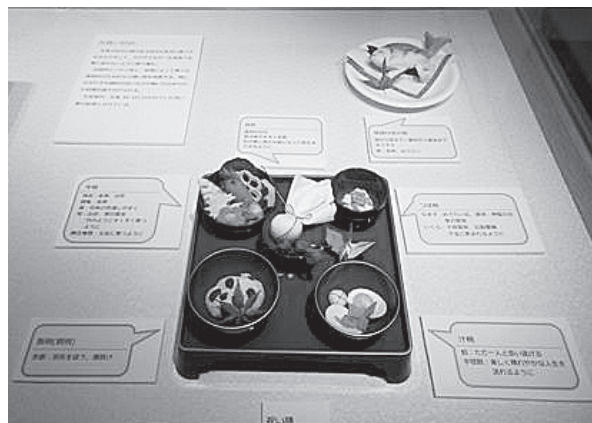
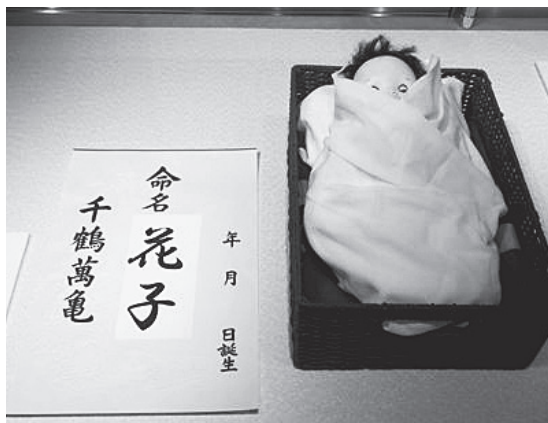
これらを経験していくことによって地域や社会に生きる人間として、ある段階から次の段階へと進むことができると考えられてきました。

こうした節目の儀礼を民俗学の分野では「通過儀礼」「人生儀礼」などと呼ばれています。

代表的なものとして母親の妊娠5ヶ月目に行われる、帯祝いから始まり、誕生、七五三、成人式、結婚式、年祝い、葬式……といったように人は一生のうちに様々な種類の儀礼を経験していることとなります。

今回は誕生から最も晴れやかな通過儀礼と言われている結婚までを一区切りとし、晴れ着や小物などの展示を通じて、子供から大人へと成長する過程で経験する様々な人生儀礼を紹介します。

それらの儀礼にはどのような意味や願いが込められているのかを、改めて知る機会になればと思います。





展示室2

「びっくり 美術世界の動物探検記」

担当学生名 石井香央利 伊藤 薫 神山 静花 笹子 優花 田中 寛子 長谷川結香
服部 愛恵 古屋 晏海 柳澤 有希 矢部絵莉夏 和田 千尋

展示趣旨

「動物」という言葉であなたは何を思い浮かべるでしょうか。

可愛らしいイヌやネコ?それとも大きなクジラや勇ましいライオン? 人類が誕生してから現在までの歴史の中で、「動物」は常に身近な存在でした。

狩猟の対象となるだけでなく家畜として利用され、ペットとして愛玩され、あるいは、人間に危害をおよぼす強力な存在として畏怖や信仰の対象にもなっています。今回の展示では空想も含め金魚から龍まで色々な動物が大集合!

また、動物たちを陸、空、水という三つのグループに分けそれぞれで東西での描かれ方の違い等を分かりやすく解説します。

動物達の姿を通して、当時の人々が周囲の動物の存在をどのようにとらえ、関わり、表現してきたのか、その一端を感じながら美術における動物達の世界を探検していただければ幸いです。

